

● シリーズ 私の見た日本 Vol.163
 “違い”が魅力や個性につながる

Suraj Pradhan (スラス・プロダン)



ネパール生まれ。
 2006年千葉大学大学院自然科学研究科博士課程修了、
 同年光井純&アソシエーツ建築設計事務所入社。
 現在、同社シニアアソシエイト。
 ネパール登録建築家。
 博士(工学)。

外部空間の在り方に見える、国ごとの違い

建築に強い興味を持ち、日本に留学し学生として9年、そして大学を卒業してから建築の仕事に携わってきたこの10年間。数多くの様々なプロジェクトに関わることができ、常に日本建築に関する知識や理解を深めている。日本の独自の都市空間構成・外部空間や建築は、私の故郷ネパールとはかなり異なるため、来日した当初は日本の都市空間構成において、広場のような外部空間が少ないことに驚いたことを覚えている。ヨーロッパのサン・ピエトロ広場やサン・マルコ広場のように建築に堂々と囲まれた整った広場型空間とは違い、ネパールの外部空間は作られたランダムな形態をしていて、空間には多くの寺院やモニュメントの配置により、複雑な構成をしている。そのため、空間全体を見渡すのは難しく、広場の領域の把握が難しい。国によって異なる風土や文化、宗教などが背景にあるため、一概に建築の比較は難しいが、大きく異なる点としては、ネパールでは周辺建築で囲まれた中庭型都市住宅が存在し、かつ、屋上空間は多目的スペースとして家族が集まり、お祭り、儀式、日常生活にも使われる。これに対して、日本では広々とした広場としての外部空間よりも「公共建築に付属する広場」や「公開空地としての広場」などによる空間形態がみられるが、基本的には街路を中心に形作られた構成が多く見られる(先斗町、妻籠など)。ネパールの外部空間においては、ヨーロッパの「広場型」と日本の「街路型」の空間の特徴を両方有していると言える。いずれにしても世界の建築は、広場や街路を中心に、それを取り囲む建築・文化などが発達してきているといえよう。欧米・ネパール・日本の広場の空間構成だけでも、これだけの違いがあるのである。ネパール人の自分が、日本で建築を学び、日本の事務所で海外の仕事を担当すると、この国ごとの違いが魅力や個性につながるがよく理解できる。

経験から感じた多様な価値観

自分の担当した光井純&アソシエーツ建築設計事務所(以下JMA)のプロジェクトで印象に残った事例を少し紹介したい。
 シンガポールのNathan Suitesという集合住宅のプロジェクトでは、4層分のピロティ部分に細い柱をデザインしており、これは、シンガポールでは地震があまりないので実現できている。また、この建物のデザインコンセプトが鳥が飛び立つ翼をモチーフとしているため、上階に行くほどバルコニーの形状が徐々に変化し、ツイストしているデザインを行っている。バルコニーの形状は各階ごとに違ってくるため、ダイナミックな外観を作り上げているが、日本で同じことを実現しようとするのは、なかなか難しいと思う。さらに、タワーの足元に広がる樹木と水景からなる「ZEN GARDEN」は日本的な庭をイメージしており、可能な限り現地を手に入れられる材料をリサーチし、選定している。また、日本では高級素材として外壁にタイルを使用することがあるが、シンガポールではそれよりも吹付塗装が好まれる。さらに、日本では隣り合う建物同士だと、窓面からの見合いをかなり気にしてバルコニーでの生活を見せない工夫に注力する。一方、シンガポールではバルコニーはリビングとしても使われ、生活を見せるのはステータスとして捉える。このようにアジアの隣国においても価値観の違いによってデザインの表現は異なるのである。

日本の暮らし、経験した仕事から分かること

10年勤務しているJMAでは、大小様々なプロジェクト、再開発、海外の案件にも関わってきた。特に、日本における再開発の特徴として、1つの小さな“街”を形成する試みがみられる。自らが関わった業務を振り返ってみると、再開発によって、商業施設、オフィス、住宅などと関連した様々な空間形態や機能を持つ広場空間が多く形成されるようになったと感じている。どんなに小さなプロジェクト

であろうと建築デザインプロセスの中で、都市的視点、周辺環境、敷地特性の分析はもちろんのこと、細やかな色彩、モデリング、模型での検討は日本独自の特徴を表していると思う。そして、大学時代に日本で建築を学んでいた際に、日本は建築基準法が厳しいという印象を持っていたが、日本で経験を深めた今となっては、安全性・性能を考えればそれは理解できる。これまで、多くの現場を担当してきたが、施工現場での素早い対応、管理された工程・マネジメントや安全対策においては、いまだに驚かされるばかりである。日本の現場に慣れてしまうと一般的で普通のことになってしまうけれども、海外での現場を経験したことのある人間はどうしても比較してしまうのではないかなと思う。日本は建築技術、施工技術が大変優れていて、建築材料も豊富。しかし、地震国日本の技術や建築材がそのまま海外のプロジェクトに使えない場合もある。その国の基準、風土、文化、宗教、気候など様々な違いによって、どれだけそれらを適応させて使えるかは、かなり重要になる。

このことを痛感したのが、2015年4月25日に母国ネパールで起きたマグニチュード7.8の地震である。多くの文化的建造物や建物が崩壊した。日本でも報道があり、記憶に新しいであろう。ネパールではもともと地震が少ないが、100年に一度大きな地震がくると言われている。大きな地震に対応する建築がまだまだ少ない現状であるけれども、国を立て直すことは必然である。今後、数年を掛けての復興が続くと思うが、耐震技術が優れている日本の技術なども応用しつつ、このような復興に役立てればと思う。日本で建築を学び、実際に日本で生活し、得た日本の文化・建築知識、そして経験などが今後も国内外のいろいろなプロジェクトに携わっていく中で、日本の素晴らしさをどれだけ表現していけるかは自分に対してのライフワークになると確信している。



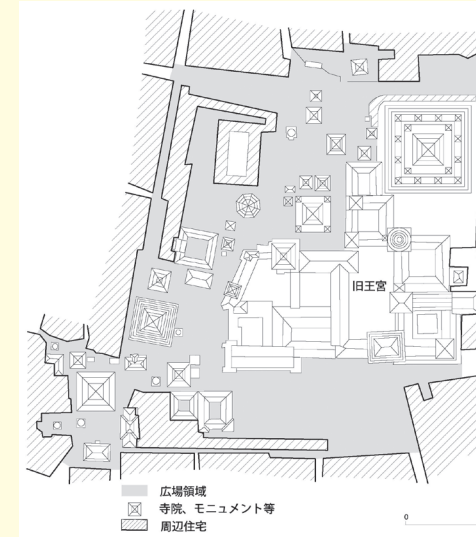
カトマンズ ダルバール広場



先斗町(京都)



サン・マルコ広場



カトマンズ ダルバール広場と周辺の中庭型都市住宅
 上6点提供 / 光井純&アソシエーツ建築設計事務所



カトマンズ ダルバール広場 左/地震前の様子



右/2015年4月25日の地震後の様子



パークシティ大崎(東京都品川区)



Nathan Suites ZEN GARDEN (シンガポール)



Nathan Suites (シンガポール)

下4点撮影 / 黒住直臣